

---

# 学級日誌

シルヴィ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

学級日誌

### 【Nコード】

N7352N

### 【作者名】

シルヴィ

### 【あらすじ】

字が汚い人間にとって、手書きほど苦痛なものはない。

それは彼も同じこと。超能力が使えたり、人より頭が賢くても、字の汚さだけはどうにもならないワケで…

## 1 日直の義務（前書き）

古泉君と長門さんの淡い恋（？）物語です。この組み合わせが苦手な方はご遠慮ください。また、カップリング論争は絶対にしないでください。

## 1 日直の義務

1ヶ月と少しの間に1度回ってくる憂鬱な仕事があります。3日前ほどから、僕は憂鬱になつてきます。

当日、いつものように登校した僕は、9組の教室のドアをあけてカバンを机にかけます。そして黒板を見て大きなため息をつきました。

「日直 古泉」

別に日直自体はかまいませんが、僕を憂鬱にさせるのは、日直の一番大きなお仕事、「学級日誌」を書くことです。これは僕にとってある意味「神人退治」よりも苦痛な仕事です。

朝、もう窓を開ける季節でもないのに、黒板が綺麗に消されていること、黒板消しが手入れされていること、チヨークに不足はないことを確認してから職員室に向かいます。

「失礼します。おはようございます、先生。」

「おはよう。今日は、古泉が日直か。」

「はい」

「学級日誌、「ちゃんと」「きれいに」書くことを忘れないように。」

（うるせえな…）

一瞬「優等生」の仮面にヒビが入りました。冷静に、落ち着いて修理します。

「はい、心がけます。」

9組の担任は、我らがSOS団の団長涼宮さんが「陰険」と忌み嫌う数学の吉崎先生です。僕もこの方にはあまり好意を抱けませんが、それでも担任の先生です。あまり邪険にするのも得策ではありません。彼に言わせれば「近親憎悪」ということになるそうですが、断じて、僕はそんな陰険な人間ではありません。おまけに今週は掃

除当番もあるので、SOS団の皆様にも「掃除当番と日直が重なるので遅れます。」とメールを入れておきましょう。

休み時間ごとに黒板を消し、放課後は教室の掃除です。仕方がないことですが、理系クラスという特性上、他のクラスにくらべて男子生徒が圧倒的に多く、教室が常に汚いのは否めません。僕もさほど綺麗好きってわけでもないのですが、言えた義理ではないですけど、毎日、大量のお菓子のクズが、落ちていたのはどうということですか？皆さん、おやつのお菓子のクズが、落ちていたのはどうということですか？皆さん、おやつの合間に授業を受けているのですか？だからテスト前に僕のところにもノートをお借りするはめになるのです。それで「お前の字は読めねーよ。なんとかしろ！」「俺たちにノート写させないようにワザとやってんだろ。」「これなんの象形文字？」と言われるのは非常に腹が立ちます。正直、一人ずつ閉鎖空間に連れ込んでゼロ距離攻撃を喰らわしてやりたいですね。

掃除当番のグループが解散したあと、黒板消しの手入れをして、明日の日直当番の名前を黒板に書きます。その後、自分の机に向かい学級日誌を広げます。もちろん、男子生徒でも字が美しい方もいますし、数少ない女子生徒の字はなぜか全員、綺麗なのですが、男子生徒の大半は、お世辞にも美しいとはいえません。そして、クラスで一番字がきたないのは僕。前回の日直のときに書いたページを見たのですが、自分でも読めません。こんな汚い字でラブレターが送られたら、その人間は間違いなく振られませんね。

しかし、これはラブレターではなく日直の仕事なので必ず書く義務があります。せめて、「丁寧」に書くことを心がけましょう

## 2 長門先生のペン字教室

「情報量にして1000テラバイト」

「な、な、長門さん？」

気配のない長門さんの不意打ちをくらい、思わず声が裏返っていました。

「長門さんも日直ですか？」

「わたしは日直ではないが、掃除当番。」

あ、近くの階段掃除は6組の担当でしたね。

「古泉一樹。」

「はい。」

「それは文字？何かの情報を含んだ記号？情報伝達用のプログラム？」

ふん、悪かったですね。ただの文字です。僕はあなたのように、プリントアウトされたような明朝体の美しい字はとても書けません。まったく、わざわざ嫌味でも言いにくたのですかね、長門さんは。

「一応読めるようには心がけております。」

「そう。」

僕が学級日誌に書く「本日の反省」の内容に頭を抱えていたとき、長門さんは、自分のカバンからノートを取り出し、ページを破って何かを書き始めました。学級日誌のほうは、何せ本日の反省ですから「吉崎殺す。」と書くわけにもいきません。さて、どうしたものでしょうか？

考えた結果、これが一番。「本日も異常なし。」

ああ、まるで「機関」への定時連絡のようですね。まあ、実際、何事も起こらなかった平凡な1日です。それに、字数が少ないほうが先生も読みやすいでしょう。これで日直の仕事は終了です。

「長門さん、終わりました。日誌を職員室に持っていったら直接部屋へ行きますけど、一緒に行きますか？」

「これ。」

「？」

「字の練習に使って。毎日一回書くと良い。次の日直の時には綺麗になる。」

余計なお世話ですよ、長門さん。あなたが言つと、正直嫌味です。

「不満？」

「いえいえいえいえ、ありがたき幸せです。だから、ペン習字の見本はありがたく頂戴させていただきますから、一緒にノートを情報操作してサバイバルナイフに変えて僕に突きつけないでください。まだ死にたくありません。」

「でも、練習する時間を作れるかわかりません。」

正直、神人狩りにペン習字まで強制されたら確実に過労死します。

長門さんと違って、僕は人間ですから、限界があります。

「こつやつたら練習もはかどる。古泉一樹。」

「…それは、バズーカ砲ですね。学校で発砲したら大騒ぎになりますよ。」

「空間情報変更済。この空間は私の情報制御下。」

あはは、たしかに教室のドアはコンクリート壁になっています。美しい女性と2人きりの空間というのは、本来、喜ばしいこととは思いますが、サバイバルナイフ改めバズーカ砲をこちらに向けられては、楽しさも喜びも一切ありません。

「長門さん、それでは字が綺麗になる前に、僕が死んでしまいます。」

「

大丈夫。いずれの行為も、あなたが生命活動を止める寸前で復旧処理を行う予定」

「待ってください、長門さん！それって「死んだほうがまし」という状態まで僕を追い込むということでしょう！しかも復旧処理「予定」って、予定が狂ったらどうしてくれるのですか？」

「許可を。」

「どうやらここで「はい」といわない限り、僕は永遠に長門さんに半

殺しにされるといふことですか。ならば受け入れましょう。毎日少しずつ練習させていただきます、長門師匠！

「次の日直のときはわたしもここへくる。もし、上達していなかったら罰を与える。」

だからって情報操作でマシンガンを作って僕に向けないでください！

長門さん、貴女はミリタリーオタクですか？だったら今度「機関」から何か雑誌でも持ってきてきますよ。「機関」の人間は趣味と実益をかねて、みんな最新鋭の武器の研究は怠りません。

その夜から僕は一生懸命、ペン習字の練習をすることになりました。今度の日直までに少しは字がきれいにならないと、今度はマシンガンで処刑されます。

長門さんが書いてくれたひらがなの手本を、ノートの下に置き、長門さんの字をなぞって練習します。いざ書いてみると、僕とは全然違うところに線があるので結構疲れます。それでも命は惜しいですから、一生懸命練習しましょう。

だけど…やっぱり僕の字はダメです。象形文字からクセ字には昇格したと思いますが。



### 3 長門先生の探点

そして次の日直の日。やはり長門さんはやってきました。

「日誌の閲覧を要求。」

「変な武器を出さないでくださいね。空間情報操作も禁止です。」

「小心者。ケチ。古泉一樹は、器が小さい。」

「何とでも言うてください。僕は小心者でケチで器の小さい男です。」

「

「イレギュラー発生時、生命活動停止時間を予測後、有機連結情報の欠損修正を実行。」

そこまでして、情報統合思念体は僕を抹殺したいのでしょうか？しかし、そうであればとくに僕は死んでいるはずです。

これは明らかに長門さん個人のご趣味ですね。僕を脅迫して、優等生の仮面を破壊するのが楽しいのかもしれませんが、ずいぶんと悪趣味です。だからといって、それを口にすれば僕はいつのまにか行方不明になってしまい、永遠に僕の亡骸は見つからないということになります。

わかりました。いいでしょう。長門さんなら構いません。せめて、痛くないようお願いします。

僕は死の覚悟を決めて学級日誌を差し出しました。

「……………」

「あ、あの、長門さん？」

「少し綺麗になった。」

わずかに長門さんが微笑んでくれたような気がしました。気のせいかもしれませんが。でも少し、ほんの少し表情が緩くなった気がします。僕は、字が綺麗になったことより、長門さんのかすかな笑顔を見ることができたほうが幸せです。

「うれしい。古泉一樹、がんばった。」

「長門さんにそういつてもらえてうれしいです。僕もホツとしました。」

ええ。それはもう。命の危機はとりあえず回避できましたからね。

「もっときれいになったら…わたしは、もっとうれしい。」

「では次の日直までに、もう少し綺麗な字を書けるようになります。またレッスンしてください。」

「了解。現状のテキストは効率が悪い。専用テキストを作成。」

「ありがとうございます。」

こうやって、僕と長門さんのペン習字個人レッスンが始まりました。字を書くのは苦痛ですが、彼女の微笑が見たいので気合が入ります。

それに、僕に夢ができました。もっと字が綺麗に書けるようになったら。もっともっと、字が綺麗に書けるようになったら、必ず貴女にささげます。僕がはじめて書いたラブレターを。

夜、長門さん特製テキストの課題を済ませた後、少し散歩に行きました。

「あ、流れ星。」

僕はその流れ星にお祈りしました。字が綺麗になること、僕の気持ち長門さんに届くことを。

#### 4 ね、長門さん

「おーい、古泉、何て読むんだ？これ。」

「ノートみせてもらって言うのもなんだけど、こんな字を読む俺たちの身にもなってくれ。」

「本当にこれ、英語かよ。宇宙人文字じゃねーの？」

「俺、脱落！」

「ぜひそうしてください。大体、僕はあなたたちのためにノートをとっているわけではありません。僕のノートなのですから、僕だけがわかればいいのです。字のことをとやかく言われる筋合いはまったくありません。」

「お菓子食べながら写さないでください！ノートが汚れるじゃないですか！」

「今さらミミズがラップしているノートに、菓子クスぐらいどうでもいいだろ？」

「お前の字より、菓子クスの方が綺麗だぜ。」

「まったく…男ばかりのクラスは本当に物言いや行動に容赦がありませんね。ならば、僕も決して容赦はしません。もう我慢の限界です。」

「あ、何すんだよ、古泉！物理は途中までしか写してないから貸せ！」

「皆さん、僕のノートは大変見づらいでしょう。他の方にお願いでください。」

「待て！古泉よ、困っているクラスメイトを助けてやるうって気はないのか！」

「まったくありません！そもそも、ちゃんと授業中にノートをとっていれば、僕の読めないノートに頼る必要はないでしょう！」

「わ、悪かった！だからせめて化学だけでも！」

「他の方をあたるか、自習してください。」

「こ、このサディスト！鬼！悪魔！人でなし！」

ええ、そのとおりです。何といわれても構いません。

「古泉君がかわいそうだよ。せつかくノートみせてあげているのに。」

「当たり前だよ。ノートを見せてもらっておいで、字が汚いだのなんだのってひどいよ。」

「古泉君、こんなやつらにノート見せる必要ないよ！」

「おい女子！古泉がちょっとイケメンだからって援護射撃すんな！」

「イケメンとか美人とか関係ないでしょ？見せてもらうのに文句を言うのはおかしいよ！」

「そうよそうよ！」

女子の皆さん、ありがとうございます。ちなみに9組に5人しかいない女子生徒の皆さんはとも仲がよく真面目な方ばかりです。この無神経な連中に混ざって3年間過ごすわけですから本当に尊敬します。

さて、手段を選ばずに行動をとった結果、滞りなく僕のノートはすべて回収させていただきました。あとは自分で、努力してください。ちなみに、僕は人が慌てふためく姿を眺めているのって、結構楽しいと思います。たとえクラスメイトでもね。

「でも、古泉って学級日誌の字はわりと綺麗だから不思議だよな。」  
「ギクッ！普段はあんな風にいつもバカ騒ぎをしています、それでもこのクラスに在籍している方は頭が良い方ばかりです。さすがに鋭いところをついてきますね。」

「日直のたびに担任に嫌味を言われると、猛烈に殺意が沸くので、そうならないようにがんばっています。」

もちろん、ウソです。僕にとって学級日誌はラブレターを書くための大事なテキストです。ね、長門さん。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7352n/>

---

学級日誌

2010年10月13日03時54分発行